



発掘調査の様子
(古代～中世の溝)

東別館建設地内における発掘調査について

文学部民族学考古学専攻 教授

あんどうひろみち
安藤広道

三田キャンパスに新築された東別館に、間もなく慶應義塾ミュージアム・コモンズがオープンする。実は、東別館の建設工事に先立つ2018年11月から翌年6月にかけて、この地で遺跡の発掘調査が行われていた。工事の前に遺跡を発掘し、今後の研究のために記録と遺物を保存するための調査である。遺跡は三田二丁目町屋跡遺跡と名付けられ、

発掘は、民族学考古学研究室の指導のもと共和開発(現・トキオ文化財)株式会社にて実施した。発掘調査は、遺跡名のとおり江戸時代の町屋跡を対象として進められた。ただ、程なく江戸時代の地層の下から、想定していなかった中世以前の遺構や遺物が次々と発見され始めたこともあり、多くの研究者から注目を集めることになった。

江戸時代では、建物跡やゴミ穴など、多種多様な遺構が折り重なるように検出され、それらに伴い多量の遺物が出土した。検討の結果、この地における町屋の形成は17世紀中頃に遡り、18世紀前半以降、料理も提供するような酒屋となった可能

性が高いことなどが分かってきた。江戸の町屋の営みとその変遷を具体的な資料を通して実感できる、大きな成果と考えている。

中世以前では溝や竪穴住居跡などが検出された。溝は三田通りに向かって直線的に延びる大型のもので、踏みしめられた箇所が存在から道として使われていたことが想定できる。溝の内外からは、

古代の硯や灰釉陶器、中世の瀬戸・渥美・常滑産陶器や舶載磁器、板碑、瓦といった、一般的な集落では稀な遺物が出土し、古代～中世のこの地に官衙かみや寺院などの特殊な施設が存在していた可能性が浮かび上がってきた。一方、竪穴住居跡は、溝より古い弥生時代終末(3世紀)から古墳時代終末(7世紀)のものである。南関東では、本遺跡のような低地における弥生～古墳時代の集落の調査例は少なく、当時の集落立地を検討するための重要な成果となった。

発掘調査の成果をまとめた報告書は、本年7月に刊行する予定である。